

教育科学研究会通信

京都教科研例会案内 359 号

1 月号



京都三条歌舞練場

日時 2023 年 1 月 28 日 (土) pm6 : 30 ~ (日程変更注意)

場所 乙訓教育会館 (ハイブリット開催)

内容 第 342 回 1 月京都教科研例会

提起

平和の危機と学校・教育

—教育 1 月号 第 1 特集から—

野中 一也 (京都教科研顧問)

新年あけましておめでとうございます。

1 月例会は 1 月号第 1 特集について討議します。2023 年は戦争と平和について今まで以上に考えていかねばならない年だと思います。野中顧問から問題提起していただく予定ですが、みなさんの問題意識を自由に語ってください。今年もよろしくお祈りします。参加をお待ちしております。オンライン希望の方は連絡をもらったら URL 送信します。

359 号目次

1, 1 月例会案内		1
2, 12 月例会の感想	池田 考司	3
	山崎 隆夫	4
	中尾 忍	7
3, わたしの研究ノート(22)	佐藤年明	8
4, 新連載企画	大西真樹男	13
5 編集後記・ニュース		14

京都教育科学研究会第341回12月例会の報告

はじめに

12月例会は関西教科研の学習会に合流しました。

あいにくの雨の日でしたが北海道や東京から参加された方があり懇親会も含め楽しい時間となりました。

提起

SOSを出しながら続けてこられた

—教科研をもうひとつの学校として—

提起 吉益 敏文

12/17は北海道から池田副委員長 東京から荒井事務局長、荒巻常任、中村さん、神奈川から山崎常任が参加してくださり関西の仲間とともに私の拙い話に耳を傾けてくださいました。

ブログやSNSで素敵な感想をたくさんありがとうございました。石本副委員長から声をかけてもらった時は大変、光栄なこととかんじたのですが、同時に果たして多くの方にお話しするような内容を自分が持っているのかなとだいぶ悩みました。結果的にこのような機会を与えてくださり大変感謝しております。自分自身の歩みを冷静にふりかえる機会となりました。

雑誌『教育』に執筆した2つの論文を軸に3つのことを話しました。自分の生い立ち、教師になぜなったのか、不当人事のたたかい、「学級崩壊」に遭遇した体験です。その中で京都教科研、関西教科研の仲間とのかわりを話しました。現地に足をはこんでくださった山崎さん、池田さん、ZOOMで参加された中尾さん、それぞれに了解をいただきましたので、あつかましいですがブログやSNS、手紙を紹介させていただきます。京都教科研や関西の仲間、こうして話を聞いてくださる仲間とのつながりが大きな財産で有り、自分の今までの歩みを支えてくれていたと思います。

もちろん様々な感想があると思いますのでひとつの参考にしていただけたらと思います。

終了後の懇親会もなごやかな交流ができ楽しいひとときをすごすことができました。感謝です。

今後の例会予定（特集と関連しつつですが報告予定者を1月例会前後に内定したいと思います。）

2月18日（土曜日）午後6時半 乙訓教育会館

2月例会

3月18日（土曜日）午後6時半 乙訓教育会館

3月例会

3月集会

3月25日 自由の森高校

8月大会

8月8, 9, 10 東京（埼玉） 自由の森高校

京都の学習会に参加して

池田考司（北海道・教科研副委員長）

昨日は京都市内で、吉益敏文さん（前教育科学研究会副委員長、前関西教育科学研究会事務局長）の講演「SOSをだしながら続けてこられた—教科研をもうひとつの学校として—」を聴きました。

吉益さんは最初に自身の幼少期、小学生時代、講師時代のことを話し、教師という仕事を選んだきっかけ、教師としての生き様の根底がそこでつくられたと語っていることを話されました。

そして、つぎに、「不当人事」攻撃との厳しい闘いと勝利について話されました。

3つ目の柱は、「学級崩壊」から関西教科研結成への話でした。信頼しあっていた子どもたちとのすれ違いから起こった吉益さんへの激しい攻撃は、吉益さんの精神状態をギリギリへと追い込むものでした。その頃、教科研能力・発達・学習分科会で会っていた私も、吉益さん自身から困難な状況と苦しみを聞いたことを覚えています。

この時、吉益さんが素晴らしかったのは、講演の題の通り「SOSをだしながら続け」られたことでした。SOSは、職場の同僚、京都教科研の仲間、教科研の仲間に出されました。そして、そこから今も続く関西教科研の結成へと動きが生まれていったのでした。

ちょうど前日、私は4年生の教職実践演習で、困難に初任教师はどう向き合ったらよいのかを考えてもらっていました。

初任教师の木村百合子さんの自死（吉益さんの「学級崩壊」と同時期です）を扱ったテレビ朝日報道ステーション（教科研釧路大会教師の危機分科会での岩辺さん、霜村さん、石垣さんの発言、そして、久富さんのコメントが紹介されていた番組でした）を観てもらい、その時代が「教員評価制度」など「教育改革」が次々と行われ、教師の分断・孤立が深刻化し、経済の新自由主義・グローバル化の中で中間層が減少し、多くの大人（保護者）が攻撃性を抱えるようになり、その影響は子どもたちの負の情動表出（学級崩壊）を生み出し、保護者の「イチャモン」「モンスター」化を生むようになっていったことなどを最初に説明しました。

そして、コロナ禍の中でのストレス、格差のさらなる進行・拡大、教育の市場化の影響も相まって、学校・教師に激しい要求（攻撃）をする保護者は変わらず多い中、保護者の「イチャモン」の背景・意図をなんとか読み取り（不当な攻撃的要求なのか、訴えには根拠もあるが訴える方法が許容できる範囲を越えたものなのか、改善の説明を拒否し続ける解決の道筋の見えないものなのか、教育観の違いによるものなのか）、対応を考える必要があること。その時、一人で抱えこまず、学校の中で教育観・子ども観が近いと思う教師に、管理職や学年の教師に相談し、保護者と向き合う時は、管理職主導でやってもらうようにすること。しんどくなったら、一時期、休職することも選択肢として考えてよいことなどを話しました。

そして、最後に教師1年目の重要な節目（4月の子ども・保護者との出会い、難しい子どもが出てきた時、保護者との関係に難しさが出てきた時）に今の時点でどう考え動いて行こうと考えるかをまとめてもらいました。

私自身は、休職を私が勧め、今は教師を続けている同僚、命を絶たれた同僚も見えてきて、追いつめられた状況になった時、休むこと、場合によっては辞めることも選択肢として考えた方がよいと思っていて、学生たちにはそのことも話しました。

講演会では、若い参加者から、しんどくなって数回休んだことと、自分の話を聴いてくれる同僚教師がいたことでいまがあるという発言がありました。

教育界の世代交代が進む中、今の時代に合った感覚での事態への向き合い方や闘い方が新たに創造されていくべき時にきていると感じます。吉益さんは、教科研の副委員長は退かれましたが、この秋から新たに日本臨床教育学会の理事になられ、講演で話された豊富な経験とその中で培われた教育論をこれからも伝えて行ってくれる方です。吉益さんのこれからの活躍も期待し、私自身も共に取り組んでいきたいと思っています。

吉益さん、素晴らしい講演会、ありがとうございました。

吉益敏文さんの講演を聴きに京都へ

山崎 隆夫(神奈川・教科研常任委員)

関西教科研の12月学習会が京都駅北口近くにある『企業組合センターしんまち』で開かれた。午後2時から5時まで。その後、場所を移動して交流会。

講演は、友人・吉益敏文さん。今年の6月まで教科研の副委員長兼関西教科研事務局を務めていた。

「吉益さんに講演をお願いしたけど2度も断られたのですよ」

石本日和子さんが後で内輪の話をしてくれた。石本さんは、吉益さんの後を引き継いで関西教科研の代表となった。副委員長は石垣さんと今滝さん。みなさん適任だ。

吉益さんはとても遠慮深い。

「...自分の事を語るのは苦手ですし、大した実践や理論があるわけではない...」

この日も最初、こんな風に話し出した。

奈良で今年6月開催された学習会の場で「吉益さんに講演を」のお話が石本さんや石垣さんたちから出された時、彼が講演を断るのを聞いてぼくも言った。

「吉益さん、是非お話してよ！ その時は京都に来るから...」

それがやっと実現できた。

吉益さんの講演の内容とその意義については、FBで池田考司さんが素敵なコメントをつけながら詳しく紹介して下さっている。ぼくは、この日の周辺のできごとと若干の感想を記しておきたい。

※

吉益さんの講演が決まったとき、ぼくは直接現地を訪れてお話を聴きたいと思った。それで1カ月前にはホテルを予約しておいた。

17日の朝は今年一番の冷え込みだった。新横浜駅新幹線ホームに立つと冷たい風が身体を震わせた。京都まで2時間の旅。膝にコートを掛けマフラーを巻いたまま小説を読んで過ごした。

京都駅に着くとさらに冷えていた。雪混じりの雨が微かに降っている。制服を着た中高生たちが駅構内の至る所に集まっている。あまりの人数に驚く。修学旅行生たちだろう。集団で移動したり構内に座っていたり...。空きスペースがないくらいの込み具合。

さてぼくは、何か口にしておこうと思い、南口商業施設2階の『コメダ珈琲』に寄って食事をした。ここで食事ができるなんてつい最近まで知らなかった。先日、ちょっとした大学の集まりで宮下さんや泉さんから教えてもらった。それまで一度も寄ったことがない店だった。

それから駅の南北自由通路を通過して北口広場へ。阪急ホテルの2つ横の信号を渡る。すると『しんまち』とひらがなで書かれた会館の看板が目飛び込んできた。エレベーターで6階ホールへ。

部屋の中を覗くともう多くの人たちが着席していた。

池田さんを見つけてびっくり。何と北海道から飛行機でやってきたのだ。ぼくのように東京やその近辺からやってきた教科研のメンバーも幾人かいらした。驚く！ 吉益さんのお話を楽しみにみんな参加されたのだ。

石垣さんがパソコンの前に座っている。司会兼ZOOM対応で大忙しだね。

それから、石本さんや滋賀の北川さんたちと挨拶。

この日は、講演会及び交流会の場で、雑誌教育でお世話になった奈良の鈴木さんや入澤さんとも親しくお話しできてよかった。

※

学習会終了後、交流会の場で石本さんから発言を求められた。その時ぼくは、『吉益さんの講演の感想』について少しお話しさせてもらったが、今日のブログはそれを思い出しながら記し、吉益さんへのお礼に代えたい。

1. 京都教科研・関西教科が30年続いた意義と歴史は大きな価値があると思う。

心ある教師たちのよりどころであり、居場所であり、民主教育を進める大きな力となってきたと思う。この持つ力を若い仲間を加えて、明日につなげていってくれたらと願っている。いま教師たちや若い仲間の教師たちは、とても困難な教育現実と闘いながら生きている。この仲間の声を受け止め、少しでも未来が切り拓けるような場がいま切実に求められているのではないか。若い教師たちが、悩み事や自己の実践などについて、自由に語り、安心して相談出来るような場が、仲間づくりの場が生まれてくれていったらいいと思う。

2. ぼくは、吉益さんと遠く離れた地であっても何かと深い付き合いをさせてもらってきた。教育実践だけでなくふだんの好みの本とか小説のことなんかもやりとりして。

今日、京都に来て生のお話を聴かせてもらってとてもよかった。初めて聞かせてもらうようなお話もたくさんあった。

第1は、何と言ってもこの吉益さんが、幼稚園なども不登校で小学校に入学した後も周囲の子どもたちの輪に入れず、なじめず、お話もできずとてもシャイな子だったことの驚き。それを大すきな先生が支えてくれたお話…。まずここに感動した。

シャイで、泣き虫で、おしゃべりもできないほど無口な吉益さんが、何と『(人権や民主主義・民主教育に対して一步も引かず)“がんこさ”を貫く』—吉益さんには、優しさと同時に原則的で厳しい“人間を大切にすることがんごな一面＝それがとても大きな魅力でもある”が、一人の人間教師となって今私たちの目の前に存在するということの驚き！

こんなふうに人間って変わるんだ！ 人間って育つんだ！…って、見事に教えてくれている。もともと吉益さんには秘めた感性の鋭さがあったのだろうけど…。(生まれてすぐ母の入院があり祖母と父に育てられ1歳をすぎて母親とあったとき最初は「お母さん」と言えなかったという…そんな成育の頃のエピソードも話もしてくれた。胸が熱くなる…)

さらに、小学校1・2年生を担当してくださったH先生のやさしさと、あることで先生から誤解されて驚くような叱責を受け子どもながらに心を痛めたこと、しかしそのH先生が真実を知り自分の間違いに気づき、心から本当に誠実に、顔色を変えてまで謝ってくれたことの思い出。その場面を、教師人生の忘れられない一コマとしてこの日語ってくれた。教師への憧れを教えてくれた一場面でもあったという。

第2に、今日のお話を聴いて改めて感動したこと。それは、学級崩壊の困難と教師人生の危機を乗り越えるために、職場の全ての人たちにその苦しみや辛さ・困難を語りかけ、SOSを発し、日々を生き抜いてきた吉益さんの人間的魅力について。

それは『“弱さ”の力』と言ったらいいか。誰にでもできることではない。ここに示す“弱さ”とはありきたりな言葉のイメージとしての“弱さ”ではない。人間の持つ魂を震わせる、そして、人間の持つ感性と共振するような信頼を呼び込むような“弱さ”と言ったらいいか。吉益さんの持つ人間性だからこそできたこと。(それを語る事ができるほど、職場の人間に対する信頼を築いていたのですね…という講演後のコメントも出されていた)

職場の全ての人たちに6年生の子どもたちの荒れの実態と教師としての苦しみを語る勇気。用務主事さんに、給食主事さんに、職場の仲間に、管理職に、教室の実態を記録しては語り続ける。

語った翌日からか教室に配られる給食が増えている。「私たちに応援できるのは給食をたくさん食べて元気になってほしいから、大目に入れといたよ。それが私たちにできることだから…。先生、がんばってね」と。用務主事さんからは1年を何とか終えた時、言葉を掛けられる。「かっこよかったぞ！」と。それはどんな意味の言葉なのか？ 主事さんは言った。「最後までやったなあ！」と。

心震わす言葉と信頼の絆によって吉益さんは日々を守られ困難を生き抜いてきたのだ！

この場では語れなかったが、京都教科研をその後創り出すきっかけとなった吉益さんの友人たちの力も大きい。ずっとずっと彼の愚痴や語りを1時間も2時間も聴き続け受けとめてくれたという。そうした仲間がすべて宝物だと。こうした仲間に支えられた…と。

第3は、吉益さんがどんな権威にも迎合したり屈したりしない生き方を貫いていることの凄さ。政治的な立場で何らかの“権威”をちらつかせつつ迫ってくる言葉とか、教委からの現場にあわない指示や上意下達の言い方とか、優れた教育研究者や実践家などの、時として事実を丁寧に見つめたり分析したりしないままの“権威的”な言い方などに対し、そうした側面が見えた時はそれに断固として反論し、跳ねのけ、与しない姿勢を貫いて生きてきたことに感動させられる。

例えば、この日の講演では、不当な人事配転(雑誌教育に乙訓の1000人を集めた教育集会のことを記した論文を読み、ある議員がこれを問題視し議会でとりあげ、教委などが屈して吉益さんを希望もしていない別の地域に見せしめのように配転させようとした)の闘いについて、それを多くの人たちの力で跳ねのけるまでの日々と心の動きについても詳しく語ってくれた。

3、「学級崩壊」の危機と今日の子どもたち、そして、今教師が生きるということ

最後に、この日の吉益さんの講演を聴いた後、会場の若い仲間の参加者などからの発言や質問があり議論なった部分について若干ぼくの思いをお話した。

今日教師が、今を生きる子どもたちとクラスづくりをしていくとき、より多くの困難がある。その困難は、子どもに寄り添う教師として誰もが避けられない現実がある。

教室にやってくる子どもたちは、様々な“傷つき体験”や生きることの困難を背負っている。あるいは子どもらしく生きる日々を奪われて…。そうしたものが白黒ないまぜになり、教室で表現・表出し生きている。そうした子どもの持つ困難さが、一人の教師に集中する時も当然生まれる。言葉にできない思いをどこにぶつけていいかわからない子どもたちなのだ。その矢面に教師は立っている。生きづらさと矛盾の矛先が目の前の教師に向けられることであるのだ。

『学級崩壊』がない学級をどうつくるかという問いがあったが、まずはこの生きづらい時代と社会を変える勇気を必要とするだろう。ぼくらはここに視点を置くことを忘れてはならない。

第一、子どもたちが子どもらしく生きられる日々を送っていない。子どもはつねに未完成で右に左に揺れ動くし、失敗やヤンチャもする。その光と影のなかに人間としての豊かさが育まれ育っていく。だから単純に、そうした“影”を否定していいわけじゃない。子どもは多様な経験を通してその子らしく豊かな人間になるのだということを保障してあげる必要がある。

学校における休み時間の意義をきちんと認めたり、遊びを保障したり、教育内容を充分整理して子どもたちが楽しく豊かに自分を発揮して学べる内容を準備してあげたりしなくてはならない。そして、教師の数や一クラスの子どもの人数ももっと少なくする必要もある。

こういうことを一つひとつ本質的に改善していかないと困難を容易く乗り越えることはできない。思春期の入り口に立つ子どもたちが、それに相応しい納得のいく人生を味わえて体験でき自分らしさを保ちながら生きられるなら、問題の噴出し方はだいぶ違うだろう。

しかし、教師はどうしてもいま現実を揺れて生きる子どもを相手にしているわけで、日々味わう困難を避けることはできない。でもその影にいつもハッとするような喜びがあって、その繰り返しの中で未来を見据えて生きて行かねばならない仕事ではある…。

※

ぼくはこんなことをお話して座ったが、吉益さんのこの日の講演では、もっともって多様な世界を語ってくれた。興味ある方は、ぜひ彼の膨大な資料とレポートを読んでほしい。

ぼくは、帰りの新幹線で(少し早めに乗車したので無事、新横浜に帰ることができた)吉益さんのレポートを読み続けた。いつもは眠りに落ちてしまうのに、ずっと読み続け、気づくと静岡駅を過ぎる頃だった。

組合運動の原点を

中尾 忍（香川・全国委員）

一気によみました。

講演を聞いただけではわからなかった、特に、吉益さんの不当配転問題での、組合、保護者の方々の運動はすばらしいものでした。最後の最後まで諦めずに取り組んだことが、最後の勝利につながったのだと思います。その時の吉益さんの心中は、大変だったと思います。そのことは全くというほど知りませんでした。今回、資料を読んで胸が熱くなりました。組合運動の原点を感じました。

私も組合の役員時代に、「指導力不足教員」で不当に認定され、研修に出された先生を現場復帰させるために、教職員組合が全力をあげて取り組んだことがあります。結果的にすぐに復帰させることはできませんでしたが、権力の恣意的な運用を強く感じました。なんとか現場復帰できた時は、みんな喜びました。吉益さんの時も、すごい喜びだったと思います。保護者の方々の力は大きかったのではないのでしょうか？吉益さんが大変信頼されていたからだと思います。

もう一つ、教師をやめようかと悩んだ「学級崩壊」の記事は、私も「学年崩壊」に近い状態になったので、非常によくわかります。共感して、すぐ電話をかけたこと覚えています。

吉益さんに、香川に来てもらったのはいつだったか、今日 12/23 に、香教組に生き、当時の機関紙「香川教育」を探して、その記事を見つけました。綺麗にはコピーできなかったのですが、送ります。ちょうど、私が書記長になったばかりの 1995 年 5 月 13 日だったのですね。たぶん、しんぶん赤旗日曜版に掲載されていたのを読んで、連絡させてもらったのではないかと思います。よく見ると、講演後、囲む会もしたのですね。ほとんど覚えていません。

ちょうど 27 年前だったのですね。たぶんその後、教科研の全国大会や全国編集会議などでお会いするようになり、京都での講座の連続学習会でお話しさせていただく機会ももらって、ありがとうございました。自分の実践をまとめるのに役立ちました。改めて、吉益さんの歩みと私の歩みをだぶらせて、考えてみたいと思いました。子ども時代の話、教師になかなか出来なかった悔しさなど、知らないことがたくさんありました。

今後は臨床教育学会を中心に活動されるとのことですが、引き続きおつきあいをさせていただくことを切にお願いして、お礼の言葉とします。

池田さんは全国編集委員になった時、副委員長の時、地域の役員の在り方についてとしてよく相談にのってもらいました。今回、北海道からかけつけてくださり大変びっくりしました。地域の教科研活動のありかたについて今でもよく話をします。山崎さんは拙本『学級崩壊』の当時から色々な助言をいただき今では趣味の本の意見交流？までさせてもらっています。よく愚痴を聞いてもらっています。中尾さんは香川や高知にいった時、時間をさいて観光？案内までしてくださる情のある方です。3人の方から過大な言葉をいただき感謝にたえません。こうしたつながりが僕にとっての大事な宝物です。

神代健彦編『民主主義の育てかた 現代の理論としての戦後教育学』（2021）（その 1 2）第 2 章
「私事の組織化」論 — 教師の仕事にとって保護者とは？（大日方真史）

【5 回中の 2 回目】

佐藤 年明

2-3. 保護者における「共通関心」形成の意義

大日方氏はここで改めて 1-2 で確認した【私的な事柄の公共的な事柄への変容（私的関心からの意識の拡大）（同）に注意を喚起し、【仮にそれが保護者の意識のうちに確認できれば、2-2 でみたような保護者間の抑圧・排除の危険性を縮減させつつ、保護者参加（私事の組織化）を追求する可能性が見えてくるのではない】（同）か、【圧倒的に大きな現実の壁（私事化状況）を前にした、可能性のカケラではあるかもしれ】（同）ないが、【そこに含まれる意味は決して小さくない】（同）と強調します。

そして、【教師の教育実践を通じて、保護者において、わが子以外の子どもたちや、教室の様子へと向けられる関心（これを「共通関心」と呼ぶことにします）が形成されてくることを示したい】（P. 55）と本論文後半の中心課題を示し、教師たちが試みてきた【保護者の関心を拡張し、保護者間の関係を形成することを可能にするための方法】（同）としては【保護者たちの「飲み会」や保護者同士が交流する「回覧ノート」など（今関 2009:82-89）】（P. 55 註(6)）もあるし、【授業参観や保護者会・懇談会を通じた保護者における共通関心形成の可能性】（P. 55）もあるけれども、としながらここでは大日方氏自身の先行研究に拠りながら【教師の発行する学級通信を通じた保護者における共通関心の形成】（同）を例示すると述べます。

大日方氏が学級通信に着目するのは、それを通じて保護者が【教室に生じた出来事や子どもたちの姿・声などといった「教室の事実」を知ること】（同）となり、それによって【保護者における共通関心の形成】が促されるからです。従って【「教室の事実」が、授業参観や保護者会・懇談会、その他を通じて保護者たちに伝わりうるとすれば、学級通信以外でも共通関心の形成が可能になる】（同）としています。

⇒共通関心形成のための学級通信以外の方法について大日方氏はここでこれ以上言及していませんが、学級通信のみに頼ることの限界性については念頭に置かれていたと私は推測しました。

本論文の末尾に掲載されている大日方氏自身の 8 篇の先行研究論文のうち、私は以下の 2 篇を読みました。

大日方真史「教師・保護者間対話の成立と公共性の再構築 — 学級通信の事例研究を通じて —」 『教育学研究』 第 75 巻第 4 号 2008

大日方真史「学校参加に向けた保護者意識の変容過程における教師の役割—教師と保護者に対するインタビュー調査をもとに—」 『三重大学教育学部研究紀要』 第 66 巻(教育科学) 2015

⇒このうち前者の論文で、大日方氏は次のように書いています。

「すでに 15 年前、碓井岑夫は、近年、自由な意見を表わしにくい職場の状況や、地域・家庭に発信する情報が管理される状況のもとになって、個性的な学級通信が発行しにくくなっていると指摘していた。」（P. 28）

私は碓井岑夫先生と 1970-80 年代に教育科学研究会社会認識と教育分科会・部会で交流させていただきました。大日方氏が援用している碓井論文は、『教育』掲載のもので、碓井論文の中の大日方氏が参照されたのは、以下の部分だと思われます。

「学級通信は、すべての教師が発行しているわけではない。現代の学校で学級通信を発行することは、父母や地

域から教師の顔が見えることになり、教師の個性や考え方、子どもの見方、教育活動の事実が顕わになることだから、ある意味でたいへん勇気のいることになっている。とくに、近年、学校が閉鎖的で管理的な組織になって、なにかにつけて足並みをそろえたり、教職員集団が一致するという美名のもとに自由な意見が表わしにくい職場の状況があるから、ますます、個性的な学級通信が発行しにくくなっている。さらに、学校に競争と管理主義がはいりこみ、教師の目が学校の外にむくようになってきたり、子どもへの対応に追われ、授業をこなすことに汲々として多忙になってくると、それを発行する教師が少なくなってくる。『多忙』化政策は、教師が自分の意見をまとめたり、自主的に交流することを妨げるために、授業、研修、会議、研究発表や部活で教師を追い回しているのかも知れない。」（碓井岑夫「教育メッセージとしての学級通信」（『教育』No. 556 国土社 1992. 12）

⇒『教育』同号は、「共感を育てる学級通信」という特集を組んでおり、碓井論文の他に以下のような論稿・実践報告が掲載されています。

太郎良信 学級通信の歴史 — その素描

橋本誠一 集団を高めていく要（小学校）

笠原紀久恵 学校は豊かな森（小学校）

尾木直樹 現代史を見つめ、豊かに生きあうコミュニティー（中学校）

木元康博 「学年だより」「学校だより」綴り続けて 2400 日（中学校）

桑田靖之 「いのちを励ます教育」のひとこま（高校）

橋本英幸 教える者がもっともよく教えられる（高校）

⇒1990 年代には碓井が指摘するような学級通信発行をめぐる困難がありつつも、学級通信を意識的に発行しながら子どもたち・親たちと交流する実践が（多数派ではなかったにしても）小中高にわたって展開されていたことがわかります。

ここからは私の全く勝手な推測なのですが、1950 年代頃から民間教育研究運動に集う教師たちによって公表されてきた教育実践記録は、上記『教育』特集が行なわれた 1990 年代頃からは下火になっていったんじゃないかと思えます（もちろん私自身はそれが当然だと思うわけではなく、重厚長大な実践の記録を読めなくなったことを大いに不満に思っています）。その一つの理由として考えられるのが、1980 年代以降の「教育技術の法則化運動」に代表されるような、軽薄短小な教育実践に関する提案／教育雑誌の見開き 2 ページで読める／教育目標について難しい議論を一致させなくても雑誌に書かれた発問・指示・説明などをそのまま使って明日の授業ができる／個々の子どもや親の抱える深刻な事情などは敢えて共有・共感の対象としない／そういう《無色を装った教育技術普及運動》やそれをバックアップする教育ビジネスの全盛です。私自身も、敢えて誤解されるような言い方をしますが、《法則化運動と民間研の間》に立ち位置を見出した「授業づくりネットワーク」の実践研究運動に 1980 年代後半から 2000 年代頃まで熱心に関わっていました。ですから上記のような 1980-90 年代の教育実践研究動向の論評は無責任かもしれません。ただ、私自身がどういうスタンスを表明するにせよ、1980-2000 年代頃の学校教育界における《法則化的な》教育技術の普及・交流の流行は、歴史上の事実です。それ以前の時代であっても、一冊の教育実践書を通読することで先輩実践者から学ぶという営みは、忙しい学校教師にとって簡単なことではありませんでした。しかしその需要はあったんだと思います。1980 年代以降、まじめな教師の学びとして、重厚な教育実践記録の通読よりも、些末だが気軽に摂取できる膨大な量の実践技術情報から任意に選択して実践力量をつけることが「人気」となったんだと思います。

ところで 1980 年代頃の私は、当時の教育科学研究会賞受賞作などをはじめいろいろな教育実践記録を読みましたが、その中で一つ大きな疑問を感じるようになりました。もう今は断捨離してしまって手元に文献がないため、あいまいな書き方しかできないのですが、例えば千葉の中学校社会科教師だった安井俊夫氏の実践記録です。

安井氏が注目した生徒のを中心にして多くの生徒が登場するのですが、その全ての生徒に「仮名」が振り当てられています。現在から見ればあたりまえだと多くの方が思うでしょう。学力や生活面での困難を抱え、問題行動を起こしながらも少しずつ変革し成長していく子どもたちの姿を安井はじめ多くの方が実践記録に描いたわけですが、そこに描かれている子どもたちのリアルな属性（氏名、学校・学級名等）をそのまま記録し・発表することは個人情報暴露であり人権侵害であるから、当然やってはいけないことだと多くの方が考えるでしょう。

私自身もそのこと自体に反対するわけではありません。現在では、教育実践記録において子どもの実名は出せないでしょう（私自身はかつて、関係者の許可を得て教師や子どもたちが全て実名で登場する教育実践分析論文を書いたことがあります。→佐藤年明「子どもの社会認識を育てる授業づくりのために」 社団法人部落問題研究所・同和教育における授業と教材研究協議会共同編集『月刊どの子も伸びる』第108号 部落問題研究所1986.4）。ただ、実名が出せないからそれぞれの生徒に仮名を振り当てて教育実践、そこでの教師と生徒を描くということに、私は抵抗を感じるのです。

結論を先に言うと、実名を出さないなら、生徒1、生徒2、生徒3…とかA、B、C…とか機械的に割り当てられた名前を使うべきではないかと思うのです。実名ではないのに太郎とか花子とか具体名を使うことに抵抗を感じるのです。読者は、実践記録に描かれるある生徒の言動を「太郎」という名前と結びつけます。もちろんそれが仮名であることは読者にもわかっているし、また同じ生徒のことがあちこちに書かれている場合に関連づけて読めるので、固有名は便利です。また「生徒1」と書かれるよりは具体的な人間としてイメージしやすいでしょう。しかし…

実世界では人はそれぞれ自分の氏名を背負って生きています。親が心を込めて付けた場合もあるだろうし、適当に付けられた場合もあるだろうし、名付けるべき人の存在が不明で代理の人が付けた場合もあるかもしれません。そういう経緯は経緯として、自分の名前が大好きな人も、また嫌いではかたがない人もいるかもしれません。そうしたことも全て含めて人は自分の名前を背負って生きています。

そしてどんな人のどんな名前であれ、他者がある人のエピソードを何らかの形で聞いた場合、その人の名前は、聞き手の世界においてエピソードの中で特定の役割、意味合いを持つものとして立ち上がると思うのです。いちばん単純なのは「〇〇さんについてのこういうエピソード」として特にそれ以上の意味づけなく聞く人に受けとめられたり記憶されたりする場合ですが、それでも「ある人が…」と具体名なしに語られた場合よりも強く印象に残ると思います。「なるほど、つよしくんだから力がつよいんだなあ」みたいに名前と事象をこじつけ的に結びつけて会話の中で笑いの対象にしたりする《露骨なラベリング》をしてしまう場合もあるでしょうが、そういうこじつけをしなくても、あとで「えーと、何ていう人だっけ？ そう、つよしくん。その人こんなことしてたよねえ。」と会話で話題にしたり、頭の中で思い出したりする、そういうときにまず名前を手がかりにすることってありますよね？ そういう意味で具体名が人に関するエピソードに離れがたくくっついている（もちろん記憶違いも含めて）ってこと、ありますよね？

実践記録の大半は、リアルな現実を描写しています。もちろん登場する人への配慮等から事実を「一部加工」してある場合もありますが、全体としてもフィクションであるような話を教育実践記録として公表することは（誰にも迷惑をかけないとしても）モラルとして許されないと思います。教育実践記録の価値、魅力、迫真性は、それが現実に生じたことであるからこそだと考えます。そして、リアルな世界では実名を持った人が相互交流・交渉しているわけです。名前をいつも呼び合うかどうかは別として、具体的な人間関係が成立している場合に氏名は当事者相互において認識されています。

仮名による実践記録は、たとえ描かれている事実がリアルなものであるとしても、リアルな事実やその相互関係、リアルな人間関係の中から「名前」の部分だけを引き剥がし、隠し、違うラベルを付与して描写するわけ

です。先に「教育実践記録の価値、魅力、迫真性は、それが現実に生じたことである」と書きましたが、登場人物の属性である氏名だけは、その特徴から外されています。

例えば実践記録の中に子ども同士の会話があり、そこで互いに名前を呼び合っているとして、親しい者同士であれば、呼び方は「〇〇〇〇くん」のようなフルネーム、「△△さん」のような苗字呼びでも「××ちゃん」のような名前呼びでもなく、「つよし」を「つよぼん」と呼ぶようなニックネーム呼びも多いはず。その呼び方自体に子ども同士の関係が反映しますよね。

しかし、実践記録中の会話の記録に登場するのが仮名であり、例えば実名が「つよし」である子を、実践記録では仮名「たけし」として登場させているとします。リアルな教室世界では、ある友だちがつよしを「つよぼん」と呼びました。このことを実践記録ではどう表現しますか？ 「たけぼん」？ 実名からのニックネーム命名やその常用には子どもたちの微妙な人間関係が反映します。実世界でつよしをつよぼんと呼んでいるという事実が実践記録で《たけしをたけぼんと呼んでいる》こととして描かれたとき、果たしてそのことによつてどのような意味があるのでしょうか？ 言い方悪いですがリアル教室世界の事実から何を選んで記録するかは《教師の匙加減》なわけですから、実名からニックネームが派生することをめぐる《虚偽の事実関係とその背後の人間関係》（＝たけしという人物は実在しないのに、そのたけしが誰かがつけた別のあだ名で呼ばれているという、実在世界と何の繋がりもない虚構）を提示してしまうという愚を犯さずに、この会話場面の実践記録への収録を断念する、という選択もあり得ます。しかし、後に大日方論文の該当箇所においても取り上げますが、教師と子ども、子ども相互の会話が挿入されることで教室場面の記録の臨場感が高まるという効果もあるので、実践記録から会話場面を削除すべしという一般方針は妥当ではないでしょう。

今までの長い述懐で要するに私が言いたかったのは、登場人物が全員仮名で登場する実践記録は、たとえリアルな現実社会世界について個人情報について配慮しながら描いたものであっても、現実世界とは異なる別の意味世界を読者の頭の中に成立させることにならないか、ということです。たとえ人物の氏名（及び、著者が何らかの配慮で「加工」した部分）以外にリアルな現実が書かれているとしても。

繰り返しますが、私は 1980-1990 年代において《教育に関する記録や提案における主役交替》があった、すなわち、重厚な特定実践の記録からお手軽な教育技術提案へと教師のニーズの《主流》が変わった、と認識しています。ただ、重厚長大教育実践記録を忌避する《気分》の中には、《匿名性》や《事実の加工》という《リアルな記録と称するものが抱える虚構性》に対して読者が食傷気味になった、という面ももしかしたらあったのではないかとというのが私の仮説です。時間をかけてじっくり記録を読み、感動も納得もした。しかし、もしかして、自分が感動し納得した内容の中に、著者の「配慮」によって作りかえられた《事実と異なる部分》が含まれてはいまいか？ という思いが起これば、読者はシラケてしまうのではないかと？

事実の加工は、あくまでも個人情報保護のため（あまりにリアルに事実を書くことで、登場人物の実在が特定されたり、その特定された人物自身が公表を望まない事実が流布したりする危険を防ぐため）、著者自身の判断（もちろん当事者との協議をも含んで）と、著者自身のモラルに依拠して行なわれる。この判断やモラル保持の是非については、登場する当事者の個人情報と人権に関わる事柄であるので、事実をあずかり知らない第三者による検証の対象にはならない。その意味で、教育実践記録は科学論文の要件を備えてはいません。第三者はもちろん教育実践記録に対して感想を述べることはできますが、そこに記述された事実や判断について著者によって「検証」することはできません。検証に必要な材料、evidence を持ちあわせていません。

「当事者への配慮から事実の一部を加工した」というような断りは、ふつう教育実践記録の冒頭などに書き添えられます。ただ……どの実践記録発表者も、実践に関係する子どもへの配慮からだけ、実践の事実の一部を「加工」するのでしょうか。一連の実践の過程で、自分自身「痛恨」の失敗があった、感情にまかせて子どもに暴言を吐いてしまった、自分の指導に配慮が足りないと親から痛烈な批判を受けた……そのような時、当初は失敗

した！自分は何をやった！と自責の念に駆られた、しかし、時間が経つ中で、いろいろな経過があり、失敗を克服していった、失敗からも学んだ、そういう教師もいるだろうし、そういう教師ならば失敗関連のエピソードも実践記録に書き込むでしょう。でも、「少々の失敗も、終わり良ければ全てよし」とばかりに、記録から省略する教師はいないでしょうか？ 私が先ほど、リアル教室世界の事実から何を選んで記録するかは《教師の匙加減》という乱暴な表現を使ったのも、ここにつながってくるのです。

うんと悪意のある言い方をすれば、ある教師が自分にとって都合のよい事実だけを繋ぎ合わせて作った記録であっても教育実践記録として成立しうる、ということ。もちろん、忙しい教師生活の中で敢えて時間をかけて自分の実践を記録し、総括し、世に問おうとする教師は良心的な教師である場合がほとんどだろうと思います。しかし、良心的でない、自己顕示的な、あるいは何か他の意図を持った教師であっても、教育実践記録を書いて公表することは可能です。その記録において事実と事実の短絡的な結びつけとか、自分に都合の悪い事実の隠蔽とか修正のような、総じて《事実の加工》を行っていたとしても、登場人物の匿名性に守られて、「事実と違う！」と糾弾を受ける心配はありません。もし糾弾を受けても、「本記録においてはどの部分が事実でありどの部分が事実と異なるかを明らかにしていないから」と批判をかわすこともできます。

話をわかりやすくするために敢えて《あくどい教育実践記録著者》を作り上げて話をしてきましたが、どこにもいないようなそんな教師ではなくて、積極的意図から教育実践記録を書く教師においても、《個人情報保護という壁》に守られていることで事実を《加工》することが容認されます。私も含めて日本の教育実践・教育学研究史上に存在する教育実践記録読者は、おそらく意識的あるいは無意識的にそこに書かれていることが事実であると《信じて》、それを《前提として》その実践から学び、その実践について検証してきました。教育実践記録の公表・普及とその検討・分析作業は、《事実と謙虚に対峙して総括した著者教師からの発信》と《その実践の事実から真摯に学ぼうとする読者》との、貴重な、しかし別の見方をすると極めて危うい関係の上に成り立ってきたと思います。

以上述べてきたことは、教育実践記録（研究会などの場で限定的に配付されるものは別として、公刊を前提として作成されるもの）というものが、著者教師を中心としてその教育実践自体に登場したり、そうでなくても著者や登場者との直接的な人間関係を持ってはいない第三者を読者として想定していることを前提とした特徴であり問題点、困難点でした。（つづく）

『民主主義の育て方』は25回で連載終了。次は勝田守一『能力と発達と学習』が予定されています。佐藤さんの研究ノートは資料提示や論理展開がおもしろく大変読み応えがあり好評です。実践記録の意味、今日における学級通信の意味、今回も色々考えさせられました。ご質問は事務局でも京都教科研の掲示板でもご自由にしてください。その都度 佐藤さんに連絡して可能な範囲でご質問に答えていただく予定です。

小さな町の大きな実験

大西 真樹男

今年 10 月に行われた大山崎町長選挙で、私たち（民主町政の会）が支持する前川町長が再選されました。得票は 4628 票で、町長選挙としては過去最高でした。なぜこのような結果になったのか、様々な場で議論されていることも念頭において述べてみたいと思います。

一つめは、4 年間の実績が評価されたということです。4 年前、前川氏が立候補する際、公立保育所を廃園にするという町の方針に対して猛反対の声が起こり、保育所の存続を求める大きな運動がありました。前川氏は、保育所の存続を訴え当選し保育所は守られました。また、中学校給食を自校方式で実現するという公約も掲げ、来年度開始に向け準備が進んでいます。雨漏りするなどの小学校校舎の改修も行われました。これらは、議会野党の公約実現を阻もうとする様々な動きに抗して実現したものです。その背景には、そういった議会の動きに町民が敏感に反応し、ビラや署名、ハンドマイク宣伝、ポスター・ステッカーに取り組むなど、公約実現に向けての町民的合意を広げる活動があったと思います。

二つめは、日常的に要求実現のための宣伝や署名活動を行ってきたことです。背景には、議会での町長与党が少数という状況がありました。そのため、町長の提案は否決されてしまいます。こうした状況を乗り越えるためには、住民の中に町長提案に対する支持を広げるしかなかったのです。同時にそれは、大山崎町の行政に目を向ける機会を提供することにもなりました。議会に備え日常的に宣伝や対話活動をすることが求められたとも言えます。

三つめは、住民の意識の変化があると思います。4 年間の様々な運動の積み上げの結果として、町政について語ることに抵抗が少なくなったこと、声を挙げれば変化が起こることを、身をもって体験したことなどが挙げられます。また、つながりを生かして独自の取り組みを広げていく人々も出てきました。

相手の意思を尊重しながら語ること、問いかけること、その結果として自主的な判断ができることなどが、ともに町政を考えていくことにつながり、今回の結果につながったのではないかと考えています。

4 年前 通信 311 号に 「小さな町の大きな出来事」と題して、大西さんに寄稿してもらいました。その時の町長選挙は 3855 票と 3718 票 わずか 137 票差で勝利しました。まさかと驚く結果でした。

「保育所がなくなる」「天王山がレジャーランドなる」と大きな世論と運動が圧倒的優位と豪語していた現職町長を破りました。あれから 4 年 同じ顔触れでしたが今回の大西さんの説明のように町長選挙は圧勝でした。要求実現の政治 声をあげれば政治が変えられる京都で一番小さい町のこの出来事はうれしいニュースでした。大西さんはその大山崎町民主町政の会の代表です。

読書・映画・DVD・CD 情報（趣味的ですいません）

① 表卸番医師診療録 1~13

上田秀人 角川文庫

山崎隆夫さんから紹介していただいた上田作品。すっかりはまってしまった。江戸時代、大奥を舞台に医師として活躍する主人公。矜持を持った主人公の描き方と上田秀人のすじの展開のおもしろさに思わず読みふけてしまった。

② 脚本力

倉本聰 聞き手 碓井広義 幻冬舎新書

87歳にしてなおも創作意欲旺盛な倉本との対談本。脚本のこころえ、新作「火曜日のオペラ」のシナリオを示しながら縦横に語りまくる。おもしろい脚本、感動する脚本とは何かにせまる。同時に年齢を感じさせない倉本の語りからエネルギーをもらう。

③ 春風譜 風の市兵衛 31

辻堂魁 祥伝社文庫

『風の市兵衛』シリーズも最終章かな？ややマンネリ気味になってきたような。とはいいつつ書下ろし文庫の魅力で庶民の目線にたった主人公にはつい同化してしまう。

○ Dr.コトー診療所

吉岡秀隆主演 中江功主演

16年ぶりの新作、映画化は初めて。医者とは何か。医療のありかたとはを静かにせまる。吉岡ほど成長する役を自分のものとする俳優もめずらしい。トラさんの満男、北の国からのジュン、3丁目の夕日の芥川など。どれもがはまり役に。次の世代にバトンをつなぐという隠れたメッセージも？

編集後記・よもやま話

※今年もよろしくおねがいします。359号は年末の12月学習会の特集にしました。雨の中、北海道や東京など遠方から参加してくださり感激いたしました。私の拙い話に耳を傾けてくださり心のこもった感想をブログやフェースブックに投稿していただきました。ご本人から了解をえましたので通信に掲載させていただきます。仲間に語り、それを聞き合いかにしていく。まさに京都教科研で、関西教科研で培ってきた事だと再認識しました。佐藤さんの連載は読み応えがあります。『民主主義の育て方』の最終章です。大西さんには4年前に投稿してもらってからその後の4年間の歩みをかいていただきました。ジグザグながら歴史の進歩に、要求で政治が変わるなと確信しました。

2、戦争か平和か、長引くウクライナ侵略のまえに日本の進路も重大な岐路に。しかし一方で政治の驚くべき劣化が進行しています。1月例会は第1特集を軸に議論したいと思います。みなさんの参加をお待ちしています。

3、ボクシングというスポーツは相手を尊重しつつ距離感を持って殴り合うものです。自分にはとてもできませんが見るのは大好きです。4団体の世界チャンピオンになった井上尚弥の戦いはすごかったです。次元の違うレベルの高さを垣間見た気がします。